

特 244

170

神の言としての
行入神

著者
赤岩 健



始



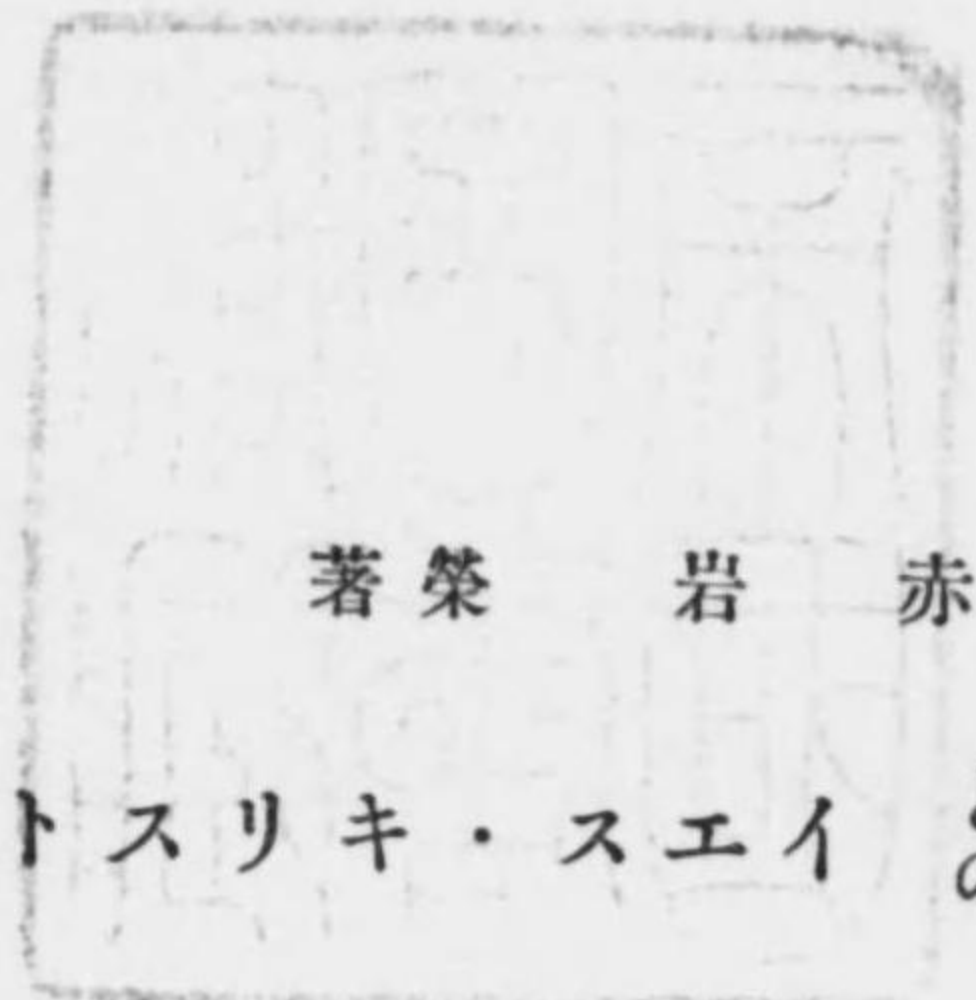
掛24

170

神の言としての
イエス・キリスト

著
赤岩 榮

特244
170



著 榮 岩 赤

ト スリキ・スエイ と言の神
の て し

トツレフンバ原上

編 三 第

容 内

- 一、神の賜物
- 二、イエスの奇蹟
- 三、イエスの倫理
- 四、イエスの十字架
- 五、イエスの復活
- 六、仲保者キリスト
- 七、顯されたる神

Ⅱ

アシレクエ原上

四三九一



序

信仰的著作の一切は、神の言なる聖書の影に隠れ、そこに於てのみ、それ自らの安息を見出さなければならぬ。若し、聖書に對するよりも、より大いなる期待をもつて、信仰的著作を手にとるところの讀者の要求に、少しでも本書が阿諛てゐるならば、本書は神の聖前に呪はれるに價してゐる。たゞ本書の存在理由は、かゝる期待の轉換的契機としてのみ存するのである。如何なる藝術家も花の色を描き得ない。それにもまして、イエス・キリストについて語ることは如何なる人にも拒まれてゐる。少くともイエス・キリストを聖書の與へるまゝに受けた者は彼を語ることの破れと不可能とを、自らのうちに強く經驗するであらう。而も、私は何故敢て、イエス・キリストを語らうとするのであるか。私は今日ほど、聖書の時代と現代との間を繋ぐ連字符の必要を、自らの牧する教會の内外に強く意識したことはなかつた。本書は、微かながらこの要求に應へるために執筆されたのである。

かくして若し讀者が、本書の實りなき評價——よきにもせよ、あしきにもせよ——に留まら

ずして、寧ろ、本書によつて聖書のイエス・キリストにまで歸りゆくことを促進せしめられ、そのことによつて、始めて四福音書を繙かれんとする兄弟達と、福音書とパウロ書簡との外相的矛盾に信仰的課題をもたれつゝある兄弟達とに、少しでも事へ得るならば、その時こそ、私は「御言」に奉仕する者として、缺け多き本書に顔あからめつゝ、なほそこに悦びを見出すであらう。

一九三三年のクリスマスを前にして

代々木にて

著者

神の言と
しての イエス・キリスト

赤岩 榮 著

一、神の賜物

今日の都會文明の横顔を人は好んで眺めるために、百貨店の磨きたてられた扉に近づく。キユービズムの飾窓、蓄音器の俗謡、充滿した大食堂、その何處に窮乏が見出されるであらうか。併し、人はそれと同時に、それらの存在を基礎づけるところの、對難物を忘れてはならない。農民の疲れた手に握られた鋤、百姓の吐息、腐敗しかかった麦飯、搾取に荒廢した農村。

恰もそのように、當時のロマ文明の奢侈を代表するカラカラ大公設浴場の影に、市民よりも數多き虐げられた奴隷と、ロマ帝國の虐政の下に苦み呻きつゝある屬國とのあつたことを忘れてはならない。ユダヤの國も亦、その屬國の一つであつた。ユダヤの國民は、當時のロマ皇帝オクタヴィヤヌスの暴壓の下に、呻吟してゐた。ユダヤ人がその取税人に對して抱いた侮蔑と憎惡を、聖書に於て知る者は、誰でも、當時のユダヤ國民を苛酷なる税金をもつて壓迫した口

マの暴政を想像し得るであらう。

かゝる屈恥のたゞ中であつて、ユダヤ國民は何を欲したか。何に期待し、何を待望したか。それは彼等をこの窮乏の中から救出する政治的救世主である。彼等はそこにダビデの再現を夢みた。こゝに、忽然として一人のユダヤ王が出現する。彼は右の手に劍を執つて先立ち進む。「起て、ユダヤの國民よ。我等の敵は神の敵、いざ主の戦を戦へ」この聲に呼應して、熱狂したユダヤの民衆は彼に従つて進軍する。そうして、ロマの大軍との一大決戦がそこに挑まれる。かつて紅海にエチプトの大軍を沈めた神の奇蹟は、再びこゝに繰返されて、敵の死屍は果々として、戦後の曠野に横はる。今や、勝利の凱歌と歡呼の聲にユダヤの國は完全なる獨立を宣言し、そこに彼等の理想なる神の選民の王國が實現するのである。

かゝる國民の待望に刺戟されて、こゝかしこに、偽救世主が出現することは想像するに困難ではない。四百人の追従者を得たチウダも、ガリラヤのユダも、それらの數多き自稱救世主の一人に外ならなかつた（使徒行傳五・三五——三九）。かゝる動搖と期待との興奮のたゞ中に、神はその選民に約束し給ふた契約を履行し給ふことを忘れ給はなかつた。その契約の實現は、田舎娘マリヤの腹に聖靈によつて宿され給ふたイエスの降誕である。朽穢なる牛馬の眠るベツレ

ヘムの假宿に、呱呱の聲をあげ給ふたイエスが、神の契約の無比なる實現であるとは、黄金の王座を愛する人間への、何たる神の愛にみちた皮肉であらう。神はイエスの卑賤なるその降誕に於て、沈黙を破つてかく語りかけ給ふ。お前達は、英雄を欲し英邁なる君主を欲する。そうして彼が、お前達の理想を完全に實現することを願つてゐる。併し、彼もまた、恰もダビデがそうであつたように、この地上をいつかは去らねばならぬ。その後、再び何が来るか。お前達は歴史の進展に伴ふ歡喜と悲歎の涯なき繰返しに、最早飽いてもよい時ではないのか。劍をもつてかちとる皮相なる政治的勝利は、決して決定的勝利ではない。お前達は今もなほ暴力をもつて奪ふところの一時的なる勝利と、瞬間に過ぎざる黄金時代を欲するのか。併し私は、決定的なる賜物を、この世界に贈つたのだ。視よ。時満ちてこの地上に生れいでしイエス、今や母マリヤの膝に無心に眠るこの嬰兒を……。

それにも拘らず、人は神の言を把握し得ない。 *homo non capax verbi divini* 人は神の永遠なる賜物を欲せずして、却つて朽ちゆく時間的賜物を欲する。彼等は荒野のマナを欲するが、永遠の生命の糧を欲しない。（ヨハネ傳六・二二——五九）この世は彼を受けずして、戸外に彼をば立せまつり、牛馬と等しく彼を取扱つた。人は自己の過失を度外視するあらゆる世界の

改革論者を喜び迎へる。併し、自己の過失を指摘し、それを取除き得る眞の救世主を欲しない。かゝる人間にとつて、神の最大の賜物たるイエス・キリストは、蹟以上の何物でもなかつた。かつてはキリストの熱狂的迫害者、その後彼の忠實なる働き人となつた使徒パウロも、イエスがユダヤ人にとつては蹟であり、異邦人にとつては愚に見えたと語つてゐる。(コリント前書一・二三) 確かに、神の無比なる賜物を感謝して受けることを欲せず、自己の空しき慾望の追求に餘念なき人間にとつて、イエス・キリストは蹟 skandalon である。誰か生來の儘なる人間性をもつて、神の愛の賜物を見て「苛立ち」を経験しない者があらうか。

私たちがイエス・キリストをば、神の賜物として、無上の感謝をもつて受けるためには、私たち自身が何であるかを知らなければならぬ。私たちは何處から來り、また何處に行くのか。私たちは何のために生れて來たのか。暗黒なる空から、一つの部屋にさまよひ來つた一羽の小鳥が、再び他の窓から暗黒なる空に消去つてゆくように、私たちは地上の生活を終つて、無に歸つてゆくのであるか。かく問はれる時智慧を誇り能力に頼む人間も、根柢的には全く自己について無知である。かゝる問に對して人間の準備せる答は、常識的な俗見か、さもなければ唯物論的な獨斷に過ぎない。人間は望遠鏡で眺める天體に關して、また顯微鏡で覗く原生動物

7

に關して、該博なる知識をもつてゐる。併し、人間は自分自身を知らない。而も人間は自己に關する全き無知に對して平然としてゐる。かゝる問題性なき人間に對して、イエスは何ら關與し給はない。寧ろイエスは、人間の存在に關して最奥なる問を發する者を求め給ふ。パウロが迫害者から、イエスの僕となるためには、彼の目より鱗のごときものが落ちなければならなかつた。永遠なる光の下に人間の限界を眺め得ない鱗に掩はれた眼に、イエスは如何に不合理な歪められた像として映することであらう。私たちの地上的希望をのみ充す如きイエスは、決して神の賜物としてのイエスではない。イエスは決して、人間の理想ではない。レオナルド・ダ・ヴィンチは、人間の理想的美を、イエスの像に描かんと欲した。併し、イエスは實に豫言者イザヤによつて語られた如く「燥きたる土よりいづる樹株の如くそだち、見るに麗はしき容姿なく、美しき容貌はなく、慕ふべき艶色なき」御方にてゐまし給ふた。また多くの人々は、イエスをば倫理的理想の具現者でもあるかの如く思惟した。併しイエスは、かゝる期待をもつて彼を眺める者に對して「われ地に平和を與へんために來ると思ふか。われ汝らに告ぐ、然らず反つて分争なり。今より後一家に五人あらば三人は二人に、二人は三人に分れ争はん」(ルカ傳一二・五一、五二) と明言された。永遠なる者の善は、時間的なる者の善に對して全く非連続であ

る。イエスは、人間の理想、人間の希望、人間の慾望の神に於ける破れを、最後に十字架上に於て、表示するために地上に來り給ふた。而も、このイエスの指示に従つて、神なき人間の限界を見た者のみが、イエス・キリストの御顔にある神の榮光の輝を眺め（コリント後書四・六）彼に於ける天地は過ぎゆくとも、過去ることなき神の言を聞き、彼の上に憩ふ神の永遠なる祝福を悦ぶのである。

ギリシャの悲劇詩人アイスキュロスは「知識は運命に比して遙かに力弱くある」と述べてゐる。私たちは造られたる世界に於て、私たちの理性が把握する知識に關して、彼の言葉に同意せざるを得ない。人は死を識る。併し、死を生に變へる力を持たない。人は生ける日の限り、自らの持てる知識を、誇らかに活用させることが出来る。併しその活用期間も、永遠なる死の相の下に *sub specie mortis* は火花の如き瞬間である。私たちの誇る科學も、かくしてはたゞ中間能力に過ぎない。私たちの過去は、不氣味なる永遠の死と沈黙であつた。私たちの未來も亦、かくあるであらう。このことの認知に於て、人は、かつて自らの力弱き知識をもつて躓き愚となした神の最大の賜物を心からなる感謝をもつて受ける。

イエス・キリストは、永遠なる神が、相對なる人間に下降的に與へ給ふた賜物である。この

賜物は初代の或る教父が語つた如く「沈黙を破つて來る神の言」であつて、彼に於てだけ、人は世界が盲目なる運命の下にあらすして、聖なる創造者としての神によつて守護され確保されてゐることを知る。彼に於てだけ、人は自己の地上的生活をば、永遠なる死への空しき放浪の旅としてではなく、希望に充ちた永遠の生命への實り豊かなる旅路として理解する。イエスをば神の比なき賜物として認知する知識のみが、運命よりも、死よりも遙に力強き知識である。

二、イエスの奇蹟

古代人は奇蹟の世界に生き、現代人は科學の世界に生きてゐる。併し、このことは古代をば奇蹟の行使された時代と見做す意味でいふのではなく、寧ろ、古代人の頭腦によつては一切の事物がたゞ奇蹟的に解釋され、現代人によつては科學的に解釋されるといふ人間學的な規定に基づいて云はれるのである。従つて、かつてイエスの神性をば立證する有力なる表示として思惟された奇蹟は、今日の教養ある人々にとつて、最大の蹟となつてゐる。昔の素朴なる人はイエスの波の上の歩行、パンの奇蹟を聖書に於て讀む時、自ら敬虔なる心となつて、イエスの前に頭を垂れた。併し、現代人はそのことによつて、聖書をば神話として退け、聖書に對する信

悪性を根柢から覆されるのである。現代人は決して滑らかなる古典趣味をもつて、恰もプラトンの對話篇でも讀むように、聖書を通讀することが不可能である。奇蹟は現代人にとつて、イエスと面接することを妨げる重い鐵の扉のように見做れてゐる。

ルナンは「イエスの奇蹟はその時代が彼に加へた強行であつた」と述べてゐる。イエス傳の研究者が、イエスの人格とその事業から彼の奇蹟を分離せしめようと努力した意圖も亦、こゝに存する。「イエス」の著者として有名はブッセはイエスの病者治癒の奇蹟をば、暗示、自己暗示、催眠の現象をもつて説明してゐる。従つて彼は、それを一時的平癒として考へ、それには一層悪い再發が続いたと見るのである。彼のこの推論は最後に「イエスは信仰を見出さない場合には、治療することが出来なかつた」(マルコ傳六・五)といふ結論に歸著する。併し、イエスがこの場合、病者を癒し給はなかつたのは、彼に能力がなかつたためではなく、却つて信仰なき者を、彼等の利己心に阿諛る意味で癒すことが神の聖旨でなき故に不可能であつたのである。一步譲つてブッセの見解を承認するとしても水を葡萄酒になし給ふたカナの婚禮の奇蹟やラザロの復活の奇蹟を、精神現象的な解釋をもつて説明し得るであらうか。勿論、彼等はラザロの活をば「主よ、彼ははや臭し、四日を経たればなり」と云つたマルタの言葉を無視して

假死説によつて理由づけたり、葡萄酒の奇蹟をば、單なる靈的事實の解明記號的な比喩として處理する。奇蹟を必要としない自己満足にふくれ上つた書齋の學者をして、論ずるが儘に論ぜしめよ。私はかゝる曲解をこれ以上取り上げて問題とする暇もなければその必要をも感じないのである。

奇蹟は決してイエスの神性の保證とはならない。あらゆる宗教的偉人も亦、過去に於て自らの超自然性の衣として、奇蹟の曖昧なる星雲を着ておりはしなかつたか。イエスが自己の奇蹟を誇示して、自らの神性を人々に表すことを欲し給はなかつたことは、癒された癩病人に「つしみて誰にも語るな」(マルコ傳一・四三)と厳しく戒め給ふたことによつても明白である。繰返して斷言しよう。奇蹟はイエスの神性を保證しない。却つてイエスの神性が彼の奇蹟を保證するのである。神の愛に充ち給ふ息吹によつて——聖靈の證明——人間イエスを、神の微行者 *incognito* として認めた者は、イエスの奇蹟を信じざるを得ない。私たちも亦、パウロとともに、キリストの神性をば、泣き叫び抵抗する幼児の如く執拗に受入れることを拒んで來た。併し、今や、聖靈の決定的奇蹟によつて、こゝに「汝は活ける神の子、キリストなり」と告白するため立たしめられてゐるのである。パウロは「彼は神の貌にてゐ給ひしが神と等しくある

事を固く保んとは思はず、反つて己を空しうして僕の貌をとり人の如くなり給ふた」(ピリピ書二・六)と述べてゐるが、かゝる主張ほど不合理なる逆説的なる蹟の言葉がまたこの地上にあるであらうか。たと神から来る聖靈の息吹を受けた者のみが、然りその者のみが、このパウロの無謀なる破れた叫びに心からなるアメンを唱和することが出来る。天地をいだけ神の力と愛を、イエスに於て見出した者は、誰も彼の奇蹟を疑はない。

従つて、イエスの奇蹟は、人がイエスと直面するために、是非最初に通過すべき扉ではないのである。若し奇蹟が現代人の蹟となるならば、暫くその解決をば保留して置かうではないか。私たちは決して、近代のイエス傳の著者の如く、奇蹟に對して人間的なる氣儘な解釋を性急に與へることによつて、自己の頭の牙に満足してはならぬ。ともあれ、奇蹟信仰は、キリストに對する信仰にとつて第二義的である。イエスと偕にあつたペテロは、屢々イエスの奇蹟を目撃したにも拘らず、鶏の鳴く前に三度びイエスを知らずと否んだ。彼が死をも賭して、イエスの僕として立つたのは、イエスが十字架にかゝり給ふた後であつたことを知る時、奇蹟信仰がイエス信仰にとつて副次的であることは明らかであらう。併し、このことは決して、イエスの奇蹟の無價値を論ずることではない。ポアンカレは、世界の不變なる調和こそ、驚嘆すべき

奇蹟であると述べてゐるが、人はかゝる驚異に慣れて了つてゐる。恰もそのように、人は神の自然的恩寵、たとへば人間の生活に必要な空氣、光、水などを心ゆくまで享受しながら、その一般性と普遍性に慣れて、少しの感謝をも神に獻げようと欲しない。かゝる忘恩的な人間に、神の愛を想起せしめるのが、イエスの奇蹟である。イエスの奇蹟は、私たちの平凡なる日常生活に對してさへ、神が不斷に考慮し給ふことの恵にみてる徴である。狂信的なる人々は、自ら病める時、藥物を用ひることを罪として退け、ひたすら病の癒される奇蹟を祈る。併し、藥物も亦、神の備へ給ふ愛の賜物ではないのか。創造の秩序の喪失された世界にあつて、人は神の愛よりも、奇蹟の力を欲する。世俗的カトリック信徒、狂信派の人々のあの熱狂的な奇蹟への渴望を見よ。そこから如何に數多くの欺瞞と罪惡とが生じたかを想へ。奇蹟の利己的な渴望者は、イエスの奇蹟の意義について、全く盲目である。私たちは、イエスの奇蹟に於てイエスの愛にみち給ふ人格を認め、彼をこの地に遣し給ふた神の恩寵を想起しようではないか。併し、奇蹟の理解はこゝに留るものではない。イエスの奇蹟に於て、神の愛を知つた者は、彼もまた奇蹟を行ふことによつて、神の愛を指示しなければならぬ。それにも拘らず人は現在のキリスト者の間に、何故奇蹟を見ないのか。學者達の饒舌を沈黙せしめるに足る奇蹟は、現

實に存在しないのか。イエスの約束は空しく消えたのか。否、そうではない。奇蹟によつて神にのみ榮を歸し、自己に一物も残さない眞のキリスト者が少いたためである。若し、跛者を歩ませしめたペテロが、驚嘆せる群集に「イスラエルの人々よ、何ぞ此の事を怪しむか、何ぞ我らが己の能力と敬虔とによりて此の人を歩ませし如く、我らを見つむるか」(使徒行傳三・一二)と述べた如く、私たちの全行爲に於て、活ける神を示指せんことを欲するならば、神は私たちにも奇蹟を行使せしめ給ふであらう。併し、人は一切を自己の所有に歸し、一物をも神のために残さない。かゝる者に奇蹟を行ふ力の與へられることは、盜人に忍術の奥義が皆傳されるにも勝つて危険である。イエスは、私たちをして奇蹟を受け奇蹟を行ふに價する者となすために、十字架の死を決意された。イエスの死に於て彼の心を受け、自己の慾望に死ぬる者のみが奇蹟を行ふに價する神の子と認められる。そうして、そこに於て彼は、奇蹟によつて享受する自己の利益の細き計算を見捨てつゝ、神の愛を感謝するのである。

最早、奇蹟の時代は過去の夢になつたといふことを止めよ。使徒たちが、イエスの御名のために辱しめらるゝに相應しき者とせられたことを感謝した如く(使徒行傳五・四一) かつて微弱であり薄弱であつた者が、嚴肅なる信仰の實踐と、日常生活の鋭き矛盾に妥協することなく耐

へ、而も、單に耐へるのみではなく、かゝる矛盾をば、神がイエスの十字架に於て永遠なる救贖にまで約束し給ふたその約束の徴として悦ぶのを見る時、私たちは「イエスの奇蹟は今日もなほ現存し存続する」と告白せざるを得ない。私はこのことを、斷じて疑はないものである。

三、イエスと倫理

現代人にとつてイエスの奇蹟が蹟である反面、イエスの倫理はそれらの人々にとつても、無上の誇となつてゐる。現代人とイエスとの關聯は、寧ろイエスの倫理と彼等との關係に於て成立するといつても過言でない。キリスト教が二千年の今日まで繼續した理由が、このイエスの倫理性に存するとは、今日の皮相なる一般的常識である。併し、現代人が誤つて退けた奇蹟の位置をあるべき場所に歸へすことがさきに負はされた課題であつたように、こゝに於ては彼等がイエスの實存在から游離せしめて理想化した倫理的理念を、再びイエスにまで歸しまつることがこゝに負せられたる第二の課題である。

自らは敢てキリスト教を信じないにも拘らず、自らその同情者をもつて任じ、子女が教會に出入することを賛成する人々は、凡てキリスト教をば倫理的にのみ眺め、イエスをば恰も一人

の道德教師の如く見做すを常とする。これらの人々は、娘が舞踏場や、映畫館に出入するよりも、教會の門を潜ることに少からざる心安さを覺えるのである。彼等の目に等しく映じるのは山上の垂訓の詩の如く美しき道德律であつた。かゝる道德律は自らこれを實踐躬行するほど困難にして苦痛なるものはなく、他がこれを實行するを眺めるほど楽しく容易なことはない。従つて、人は山上の垂訓をこよなく讚美するが、これを實行しようとは意圖しないのである。併し、人はかゝる傍觀者の中にあつて、トルストイの名を記憶しなければならぬ。彼は、イエスの倫理をば「我が宗教」とした人であつた。多くの時代の人々がイエスの倫理的教説に自ら慰めを見出してゐた時、彼は唯一の實行者として「惡しき者に抵抗すな。人もし汝の右の頬をうたば左をも向けよ」(マタイ傳五・三九)とのイエスの命令に文字通り従つて血みどろな苦闘に生きた。併し、彼は一寒村に於ける死とともに、彼自らの宗教の敗北者として生の幕を閉じたことは、誰の記憶にも鮮かである。イエスの倫理の嚴肅性は、またその不可能性でもあつた。そうして、それはトルストイの如き、眞面目なる實行者によつて實證されるのである。

このことはイエスの倫理が、ユートピアの倫理、空想の倫理であるとの、左翼の人々の逆宣傳に役立つ。確かに現時のヨーロッパ、アメリカが、このことを表明してゐないか。若し山上

の垂訓の極微なる實行の一つでもが可能であつたならば、あの世界大戰の慘劇は未然に防止されたであらう。遠くその例を外にもとめるまでもなく、今日の私たちキリスト者の行爲こそ何よりも端的にイエスの倫理の空想性を暴露しておりはしないか。かくして、**イエスの倫理の嚴肅性は最早、私たちキリスト者の日常生活の外に置かれて了つた。**「自らの十字架を負ひて、我に従へ」(マタイ傳一六・二四)との權威にみち給ふイエスを、今日のキリスト者は知らない。今日のキリスト者は、嚴肅なる神への聖日禮拜をば、自己の時間の餘裕の有無によつて自由に處理する如く、イエスの倫理をも、自己に損失を招かない限りに於て、その實行者たらうと欲するのである。それ故、今日のキリスト者の倫理生活は極めて低調となり、禁酒、禁煙が辛じて眞面目なるキリスト者の徴とさへ思はれるに至つた。そこには神の國を勝ち取らうとする火の如く烈しき實踐は失はれ、倦怠にみちた愛情の囁が、近代キリスト教倫理の場所を占めた。イエスの倫理の神的嚴肅性は、今や人間の幸福主義的色彩に塗變へられて了つてゐる。自己の現状を眞に認識する私たちは、ニーチェが呼んだ「奴隸の宗教」の汚名を甘受し、また「惡漢をやつつける」(cecasez l'infame!)と罵つたヴォルテールの聲に黙さなければならぬ。

併し、果してこのことは、イエスの倫理の空想性に起因するのであるか。否、イエスの倫理

の實行不可能性は、決して、イエスの倫理の價値を廢棄するものではない。寧ろ、イエスの倫理は、人間の隠れたる原罪を糾弾する神の義の主張である。バルトが語る如く、倫理的人間の誇と、尊嚴とは、自然よりの人間の優越を示してゐるが、その實行的不可能性は、人間の神からの墮落を示すものである。カントはこの人間の倫理的尊嚴と誇とを、人本主義的彼の哲學の主題として取扱ひ、パウロは人間の神からの墮落を、神中心的ロマ書の出發點となした。イエスの倫理は、決してそれを讚美し、而も敢てそれを實行しようと決意しない傍觀者には把握されない。イエスの倫理は、その不可能性によつて、何よりも私たちの現實的罪を摘發する。「もし右の目なんちを踏かせば切りて棄てよ、五體の一つ亡びて全身ゲヘナに往かぬは益なり」とはイエスの倫理の嚴肅なる要求であつた。かくして人は、五體のうちの何處を罪なき場所として自らに殘し得るのか。私たちは目のみではなく口をも、口のみではなく耳をも、耳のみではなく鼻をも、かく顔の部分のみではなく胸、腹、そして腰また足をも凡て抉り出して棄てなければならぬであらう。人間はかくして、神の御前に全き部分を何處にも持たない。罪人、失はれた者、それが神の御前に立てる人間の全貌である。

イエスの嚴肅なる倫理的要求の前には、それを讚美するキリスト者も、嘲笑と批判をことゝ

せる傍觀者も、等しく罪人として顯はされる。ルッターは「然れば凡て人を審く者よ、なんち言ひ遁るゝ術なし、他人を審くは正しく己を罪するなり。人をさばく汝もみづから同じ事を行へばなり」との、ロマ書二章一節のパウロの言葉の註解の中で、興味深き例を擧げてゐる。それは有名なアレキサンダー大帝と海賊との會話である。捕縛された海賊が或る日大帝の前に引出された。そこで「何故お前は海を騒がせたか」との大帝の詰問に海賊は答へて、「私は一艘の小さな船で海を騒がせた。それ故私は海賊と呼ばれる。併し、汝は大なる艦隊をもつて、このことをなした。それ故、汝は支配者である」と云つた。神の聖前には、アレキサンダー大帝も海賊も差別なく罪人である。「義人なし、一人だになし」との叫びは、神の律法の嚴肅性に目覺めた者の伴らざる告白ではあるまいか。而も、私たちは滔々たる罪人の洪水の中に、唯一の罪なき者を見出す。それはイエス御自身であり給ふ。彼は自らの倫理の唯一の實踐者である。併し人は反對して問ふであらう。イエスが宮で賣買する商人を繩の鞭で逐ひ出し給ふた事實は、彼が自らの倫理の破壊者であつたことを意味しないか。併し、神の御前に自らを潔くせんとする者は、こらしめの鞭を感謝する。詩篇記者は歌つて「なんちの答、なんちの杖われを慰む」と語つてゐるではないか(二三・四)。このことに於ても、イエスは己の如くその隣人

を愛するところの彼の倫理的原則から乖離し給はなかつた。注視せよ。イエスの倫理は、人の欲せざることを單になさざる退嬰的倫理でないことに……。イエスの行爲に缺陷のある如く思はれるのは、未だかく見做すところの人々が、彼の人格を理解し得るだけの域に到達してゐないことを意味する。

然らばイエスの倫理は、人間の原罪を摘發する消極的なる役割にのみ終始するものであらうか。否、イエスは全身罪の創痕を負ふて義なる神から棄てられた私たちの赦罪のために、神の御前に自らを犠牲として獻げ給ふた。神はこのイエスの十字架の贖罪によつて、倫理的實行力を把持せざる罪人を赦し、罪なきイエスと等しく私たちを受入れ給ふ。かくしてイエスの上に憩ふ永遠の祝福を、神は罪人なる私たちにも分與し給ふた。パウロは聖書のこの中心眞理を雄勁なる文字をもつて、「凡ての人、罪を犯したれば神の榮光を受くるに足らず、功なくして神の恩恵により、キリスト・イエスにある贖罪によりて義とせらるゝなり」と記してゐる（ロマ書三・二三、二四）。この驚くべき信仰の覺知と同時に、私たちがうちに限りなき感謝が溢れる。そうしてこの感謝と喜悅とは、私たちがうちに新に福音的性格を形造るのである。そは、イエスの恩寵に應へまつり、いかにして、神の聖旨に添ひまつらんとするところの意志である。こゝ

に唯一の實行可能なるキリスト者の倫理が生れる。それは、實行不可能なる律法的嚴肅倫理でもなく、また、ふやけた核心なき幸福主義倫理でもない。それは恩寵の倫理である。取税人の首ザアカイ、遊女マグダラのマリヤの悔改の後に來つた、彼等の全行爲こそ、恩寵の倫理の雛形である。

イエスの十字架は、人間の倫理の終了であると同時に、それは恩寵の倫理の起始である。かかる意味で、眞にイエスの恩寵に徹した者は「恩寵は律法を廢棄せず、寧ろ完成す」*Gratia non tollit legem, sed perficit* と告白せざるを得ないであらう。

四、イエスの十字架

イエスの奇蹟によつても、人は究極的救を完うすることが出來ない。イエスの暖き心情によつて復活せしめられたラザロも、やがて再び死なねばならないであらう。イエスの同情によつて歩むことを得た跛者の足も、やがてはまたその生理的の死によつて硬直する時が來るであらう。イエスの「開けよ」との聲に、直に置はしき自然を展望し得た盲人の眼も、やがて再び閉じて開かない日が來るであらう。今日の醫者の人間的可能性の限界は、また人としてのイエスの奇

蹟に於ける限界でもあつた。イエスの地上的生活に於ける奇蹟は、微かにイエスの輝かしき永遠の救贖を暗示する隠喩ではあり得たであらう。併しそれは、イエスの救贖そのものではなかつた。イエスの使命とその事業とは、直接的には、彼の奇蹟的業と關與しない。彼の無比なる事業は、かゝる事實とは關聯なき全く別なるものである。

またその倫理も、奇蹟と同様にイエスの聖なる事業の下には、下屬的なる領域として評價されなければならぬ。倫理によつて、人は容易に神の國をちとり得ないであらう。私たちは人間の倫理的完成に於て、神の國が實現する如く見做すところの近代社會的キリスト教の空想性に對して、聰明であらねばならぬ。神の國は、如何なる場合にも、神の聖なる支配と、餘すところなき人間の信仰的服従であつて、それ以外のものでは決してない。人間の倫理的完成が即ち神の國の實現であると見做すところのキリスト教的理想主義は、常に神と人間をば同一線上に連續的に眺めてゐる。併し、人間は人間であつて、神ではない。若し、イエスの神の國を私たちの倫理的理想として定位するならば、私たちはその實現の過程に於て斃れなければならぬであらう。かく個人はいふまでもなく、人類の歴史も亦、かゝる倫理の完成を希望し得ない。科學は發達し人知は長足の進展を遂げた。併し、人類の倫理は、一つの場所に右往左往し

てゐるではないか。そは恐らく、今日も、明日も、變ることがないであらう。過去に於て行はれたあの野蠻なる殺戮を今日眺め得ないからといつて、現代が倫理的發展の過程にあると見做すことは、餘りにもお目出たい考方である。過去に於て公然と行はれた野蠻行爲は、今日、隱然とより廣汎にわたつて行はれてゐる。野蠻人の無邪氣なる殺伐行爲よりも、文明人の隱險なる殺人行爲の方が如何ばかり社會を暗黒にすることであらう。都會に於ける目も覺むるばかりの電燈の輝き、ネオンサインの仄光の影に、人の心情は一層冷く暗くなつてゆく。文明人の微笑の假面の下には、野蠻人よりもより尖鋭なる肉食獸の有毒なる牙が隠されてゐるのである。人間は神から棄てられてゐる。従つて、若しこの地上に於て倫理的理想を實現し得たとしても、運命の決定的力から自由であることが出来ないであらう。併し誰もこのことを神に抗議する権利がない。それは人間が神に服従せず、神を全く忘却して了つた結果ではないのか。罪とはシュライエルマッヘルが思惟した如く、單なる善の缺け (ein blosses Manko) として量的に思料すべきものではない。寧ろ罪とは神をさしおいて、神以外のものを愛する意志である。而も、この罪が、私たちの服従に應へて與へるところの報酬は、死に外ならない。かくして、聖パウロは神なき者を、世に在りて希望なき者であると斷定した (ロマ書六・二三、エペソ書二・

一二。神に反逆しての人間の能力は、たかだかイエスの奇蹟と倫理の領域をさへ越え得ないであらう。而も現代人は自らの能力がイエスの倫理を越え、自らの科學的力がイエスの奇蹟を凌駕してゐるものゝ如く考へて、イエスを無視する。併し、イエスに於て神に服従せざる人間の最後は死である。死に目覺めた者の自覺は絶望である。こゝにイエスの十字架の必然と自由とがあつた。

ゴルゴタの丘に倒れたり起きたりしながら登つてゆくあの黒い十字架の影を視よ。やがて丘の上に三つの十字架が立てられる。群衆は眞中の十字架を眺めながら諷つて「宮を毀ちて三日のうちに建つる者よ、もし神の子ならば己を救へ、十字架より下りよ」と冷笑する（マタイ傳二七・四〇）。今や、こゝに自らを救ふ必要な唯一人の御方が、罪の奴隸となりその結果として死の報酬を受けつゝある人間を、永遠なる生命にまで贖ひ返すために、自らの尊き生命を獻げ給ふたのである。茨の冠から落ちる血が、汗に雜つて御顔を流れた。御脇を刺した冷き槍の穂先を傳つて血と水とが大地に落ちた。傍觀者は、ルッターが「キリストの十字架について」の説教のうちに語つてゐる如く、それが自らのための苦難であることを知らない。突然沈黙を破つてイエスは「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」（わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひし）と叫

び給ふた。イエスが息絶え給ふ直前のこの叫びを聞いた人々は、今日これを聖書に於て讀む人々と等しく「イエスもまた單なる人であつた。私たちと等しく否それよりもより弱々しく、自らの確信を裏切つて悲しくも絶望のうちに、息絶え給ふたではないか」と心のうちに云ふのである。何時まで、神の愛と人間の思とは、かくも喰違ふのであらうか。私たちに於ては、私たちの確信の動搖と共に、恰も風にゆらぐ樹から木の實が落ちるやうに、私たちの神觀念もまた等しく振落される。それに反して、イエスに於ては、御自らの生の震盪のたゞ中にあつても、現存し給ふ神は見失はれなかつたのである。イエスのこの絶望的叫びは、恰も光の明さの中にあつた者のみが闇の暗さを意識するように、神と偕にあつた者の、神から離れた瞬間に於ける經驗であつた。私たちは神なき絶望と恐怖に生きながら、それを經驗せずして平然としてゐる。私たちは義なる神の罪人に對する怒に關して餘りに盲目である。イエスは、罪人として神から見棄てられた私たちの宥和のために、神の御前に私たちの罪を負ひ、神の義なる怒の矢表に立つて、かゝる絶望と恐怖を私たちに代つて經驗し給ふた。誰が聖靈の息吹を受けずして、このイエスの贖罪的經驗の深みを理解し得よう。ゲッセマネの園に於て、イエスが血の汗を滴らせつゝ祈り給ふたその事實を、若し人が、肉體的死の苦痛から脱れんと欲するイエスの苦闘

であつたと理解するならば、その人は未だイエスについて何事も語る資格を持たない。イエスの最大の苦痛は、神から見棄てられることであつた。他の如何なる苦痛にも、彼は雄々しく耐へ給ふであらう。併し、神から離れる苦痛に、彼は瞬間も耐へ得給はない。而もこの苦痛を、私たちの永遠なる救拯のために私たちに代つてイエスは経験されたのである。十字架上に破れたイエスの心臓は、神が罪人なる人間に對していただき給ふた御怒の終熄、即ち神と人との宥和の永遠なる被てなければならぬ。イエスは自らの生命を、私たちの罪の赦のために獻げ給ふた。パウロはそれ故私たちに「罪の拂ふ價は死なり、然れど神の賜物は我らの主キリスト・イエスにありて受くる永遠の生命なり」と告白せざるを得なかつたのである。

神の御前に、私は罪に破れてゐる。私の家庭も、私の社會も、また罪に破れてゐる。神の國の植民地である筈の私たちの教會も、不幸にしてその例に洩れない。一切はそれ自ら完結してゐる如く見えて、全體として破れてゐる。私たちの倫理も、私たちの科學も、また私たちの藝術も、これらの人間的能力の凡てをもつてしても、この破れは一層大きくこそなれ、決してその破れを繕ふことは出来ないであらう。神から距離した世界は、破れてゐる。併し絶望することはない。十字架上に於けるイエスの心臓の破れこそ、一切の破れを、新なる創造にまで恢復

する否定の否定、コロサイ書のかの偉大なる完結と綜合にまで、世界を導き歸す神の能力である。それにも拘らず、有限者は無限者を理解し得ない *finitum non capax infiniti*。自らの破れを意識せざる弟子達は、イエスの死に、師の敗北を眺めて、再び昔の漁夫たらうとしてガラヤに歸ることを欲した。たゞ聖靈の智慧に啓發されて、一切の人間的なるもの、破れを識つた者のみが、イエスの心臓の破れの中に、「我すでに世に勝てり」との神の言を聞くことが出来る。イエスの十字架は、神に背馳した世界への、神の嚴肅なる審判である。

五、イエスの復活

或日、私は山路を逍遙して、森に圍まれた水蒼き一つの池を見出した。それは風なき靜寂なる午後である。私が池を眺めた刹那、池の中心から起つた波紋が、圓く輪を描きながら岸に近づいてゐた。池の中心に何事が起つたのか、私が此處に立つた時には、既にその出来事は終つてゐたので、私は池の畔にたゞづんで擴りゆく池の波紋を眺めながら、様々な想像を描き得るに過ぎなかつた。私はそこで一つの解釋をなした。恐らく一つの石が山頂から轉び落ちて、彈をうつてこの池の真中に墜落したのであらう。私が今、こゝに、眺めてゐる一つの波紋はその

結果に外ならないのだ。若しこの想像があたらなかつたとしても、何かかゝこの池の只中に起つたことは争はれない事實であらう。この池の波紋には、何かの原因が存する筈である。

私は今、東京の片隅の一傳道者として、上原の町で集會をもつてゐる。それは今日のキリスト教界に描かれた大いなる波紋の圓周に於ける小さき目にもとまらない漣にも譬へ得よう。この漣は、その以前には東京の有力なる教會であつた信濃町教會に溯り、スコットランドの教會、改革者カルヴィン、ルッターの教會、また人間的迷盲の重荷によつて躓き倒れなかつた以前のカトリック教會、一層その中心點に近づくならば、パウロ、使徒達の初代教會の波紋に連つてゐるのである。二千年の長き歴史に於て起りそうして消え、今日もなほ彼方へ彼方へと波紋を擴げつゝある教會の傳道を見る時、その波紋の中心點に、何かかゝ起つたことを確信せざるを得ない。その波紋の原因とは、如何なる事實であらうか。

それは外でもないイエスの復活である。誰もこのことを聞いて、餘りの不合理さに泣き且つ笑はないものがあらうか。併し、イエスの復活を神話若しくは童話として嘲笑し去る近代的感覺の所有者も、歴史に起つたこの波紋に盲目であることは出来ない。如何に多くの人々が、これまで、この事實の證人として、血と肉とを獻げたことであらう。パウロが傳道の初期に於て

あらゆる窮乏と迫害とに耐へながら數少き小アジアの聽問者に語つた言葉も亦この事實であつた。この時でさへパウロはこの事實が惹起する波紋の結果が、全世界に波及することを信じて疑はなかつたのである。またかのステパノが、最初の殉教者として、復活の證人としての光榮ある死を遂げ、輝かしい金色の波紋を彩つたことも、使徒行傳を讀むことに、私たちの記憶に新しい事實ではないか。

併し傍觀者は次の如く問ふであらう。確かに私は私の眼をもつて、その波紋を眺めてゐる。だがこの偉大なる波紋の原因となつたものは、復活の事實ではなくして、復活の迷信ではあるまいか。十字架上に於ける悲痛なるイエスの最後の叫は、彼の失意と絶望とを物語る言葉に他ならなかつたのに、弟子達は巧みにイエスの死骸を盗み去り、彼の死後數日を経ないうちに生前のイエスの教説とは全然かけ離れた新らしい教義を編み出して、これこそ人類の罪を一身に負ふて、死んで又甦つた救主の姿に他ならないと宣傳するに至つたのではないか。若しライマールの云ふが如くイエスの弟子がかゝる嘘言者であり、ロシアの昔の僧侶の如く宗教的詐欺師に過ぎなかつたならば、使徒達が「神はこのイエスを甦へらせ給へり、我らは皆その證人なり」(使徒行傳二・三二)と語りつゝ、四方より迫り來る迫害に雄々しく耐へ、そうして最後に彼自ら

の言葉を裏書きして殉教したことを如何に解釋すればよいのであるか。若し彼等が私腹を肥すために、かゝる迷妄なる教義を案出したと假定するならば、かゝる偽の教義のために自ら死を選ぶといふようなことはあり得ないことではないのか。イエスの死の直後まで尻尾を巻いた野犬の如く戦々兢兢としてゐたシモンが、岩の如く堅き信仰の勇者として殉教することによつて聖ペテロとなつたのが、彼の作爲による偽の教義に原因したとでも云ふのか。弟子達は決して復活の教義の發案者ではなかつた。否、却つて彼らは復活の事實の證人に他ならなかつたのである。そのことは何よりも、イエスの十字架以後に於ける彼の後生涯が雄辯に物語つてゐる。使徒達の活動の原動力は、まさしくイエスの復活にあつた。そうしてこの事實の波紋に連る微弱なる私達も亦、生來臆病ではあるが、このことの證人としてふさはしく生きんことを欲し祈つてゐる。

「死者の復活」の表題の下にコリント前書十五章の講解を書いたバルトは、この章がコリント前書の結尾また頂點であるのみでなく、それは鎖鑰點シユリツセル・ポイントであると述べてゐるが、そのことはイエスの生涯とその復活との關聯に移しかへつてもまた妥當する。イエスの復活は、人として微行し給ふたイエスが、神の獨子としての全き御姿を人々の前に啓示された瞬間に他ならな

い。イエスの復活の事實に於てだけ、イエスの言葉と行爲の謎にみちた晦冥は、正しき理解の明みにまで持ち出される。單なる教師として、また豫言者として、或はまた政治家として、イエスの行爲を眺め、イエスの言葉を聞く時、人はバリサイ人と共に、イエスを狂人として見出すであらう。四福音書のイエスは神の子であるか、さもなければ狂人である。或は樹をも善しとし、果をも善しとせよ。或は樹をも悪しとし、果をも悪しとせよ（マタイ傳二・二三）。たゞイエスの復活の光に照して彼を識る時だけ、この蹟こそ、イエスが神の子でゐまし給ふ裏書となるのである。かくして、この復活の確證と同時に、ヨハネ傳第一章がその序説に於て雄大なる筆致をもつて告白せざるを得なかつた。キリストの先プレキリスタント在も、また文學者が醜い幻想をもつて描くを常とするイエスの處女降誕 *natus ex virgine* も、聖書が告げる儘の潔くして深き根源的事實として信じられるであらう。

然らばこのイエスの復活は、人間の側にとつて何を意味するのか。さきに、イエスの十字架が神に背馳せる罪人としての人間に對する義なる神の怒と審判であることを告げた。丁度その逆に、イエスの復活は、愛なる神の罪人への赦、死すべき者への永遠なる生命の約束を意味する。神は御自らの分たれることなき義と愛の御意志をば、二つの仕方なるイエスの十字架とそ

の復活に於てのみ決定的に私たちに啓示し給ふた。神はイエスの復活に於て、塵と灰に歸すべき人間に、御自らの變ることなき愛を與へ給ふた。永遠の生命に對する希望の確さは、死に吞るべき現在の生命によつて要請されたる靈魂不滅にはなくして、却つて、この神の獨子なるイエスの復活の事實に存する。このイエスの復活の生命に於て、人間の有限なる生命とは全く別なる (totaliter alien) 神の永遠なる生命を捉えた者のみが「我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬるとも生きん。凡そ生きて我を信する者は永遠に死なざるべし」(ヨハネ傳一一・二五) と語り給ふたイエスの御言葉を受入れる。神は永遠の生命を私たちに與へ給ふた。この生命はその子イエスにある。御子をもつ者は生命をもち、神の子をもたぬ者は生命をもたない (ヨハネ第一書五・一一、一一)。

キリスト者はイエスの復活に於て、永遠の生命の保證を神から受けた。こゝにキリスト者の打算を越えた生活が展開する。それは上よりの (Canaan) ヨハネ傳三・三) 生活、即ち甦生である。眞のキリスト者が、神を忘却して快樂を樂しむよりも、神に仕へて勞苦することに限りなき悦を見出し、神なき自由の空漠さよりも、神に束縛されるものゝ力強さを誇り、神の恵を拒んで自らの空虚なる利得に走るよりも、十字架を負ひてキリストに従ふことを光榮とするのは

何故であるか。それは、永遠の生命の保證を、イエスの復活に於てもつ故である。かゝる神の保證に生きるキリスト者の生活こそ、死の所屬たるこの世に對しては、復活の證人としての名譽ある生活に他ならない。若し私たちに於て、この信仰生活を、日々繰返へす日常生活の瞬間瞬間の決断に於て選びとることを欲しないとするならば、私たちは恰も「空虚なる壘の芳香」の如く、眞のキリスト者ではない。實にイエスの復活は、私たちが單なる言葉をもちて宣傳すべき事實ではなく、使徒及び聖徒達とともに、私たちの全生活をもつて告白すべき神の眞理である。

六、仲保者キリスト

生來の儘の人間にとつて、聖書の神は、人間の生と死の彼方に横はる大いなる疑問符である。そこに於て人は「神」といふかの偉大なる單語を、不氣味なる運命と同視して考へるのを常とする。併し、この偉大なる疑問符に、自己の全生命と全生涯とを投げかけて、問を發する決意をなした者は、やがて必ず神を見出すであらう。パウロのキリスト者迫害は、その意味でこの問の異なる一つの仕方であつた。眞實なる神は、隠れてゐまし給ふ神であつて、人間の疑

問符の背後に立ち給ふ活ける實在者である。人間はたゞ被覆の外より、「神は眞に存在し給ふか。若し神の存在が幻想にあらざば、何故人間の呼びかけに對してかくも長く沈黙し給ふか」と問ひ得るのみである。この問には、二つの異なるアクセントがある。一つは好奇心から出づる氣紛れなる遊戯的問であり、他は生命を賭して、運命の底を叩かんとする問である。前者の問に對しては、問を發せざりし以前と等しき沈黙をもつて神は彼の問を默殺し給ふ。後者の問に對しては、より深刻なる沈黙をもつて、神は御自らの答に代へ給ふのである。

神の沈黙は、より大いなる答である。そこに於て言葉なき神の沈黙は、次の如く語り給ふであらう。私は汝を曠の如く愛する。汝の呼びかけに、私は應答せんことを如何に欲したことか。併し、爛れた肉の意志によつて、私の義を希求せずして生ける汝を、どうしてその儘愛し得よう。汝は私の路を棄て、汝の路を選び、私の前に罪を犯した。私は燃ゆる怒をもつて汝を憎む。私は決して、欺かれながら不義なる子を溺愛する甘やかな父ではない。かゝる父は、眞にその子を愛する資格なき父である。不義を默認しつゝ、その子を愛することは、救ひ難き墮落の底に彼を押やることではないか。父が眞にその子を愛するならば、身も引き裂れる如き嘆をもつて、罪の子を戸外に閉出すであらう。神に於ては、その怒も亦、慈愛であり恩寵である。

冷き風の吹きすさぶ孤獨なる戸外に最後の悔改を期待しつゝ、神はかく私たちを完き者として見出さんがために、今やこゝに不完全なる者として捨て給ふたのである。

而も人間は、閉出された暗黒の中にあつて神の怒に眩きつゝ、不義なる自己を顧みない。そうして、自ら暗黒の中に家を築いて、恰も神を閉出したものゝ如く、神を無視して、罪の奴隷として生きる。かくして人は全く神の敵となつた。併し、人間の手によつて建てられた地上の家が、朽ちゆく幕屋に過ぎず、神の否定の嵐の前に、人はその家を失ふて、最後に頼みなき永遠の孤兒として絶望しなければならないかの目覺めたる第二の死を豫知した者のみが、破れた彼の扉を叩き給ふキリストの聲を聞くのである。キリストは、神と人との隔絶、相互疎外の宥和者として神の側より敵のたゞ中に *in medio inimicorum* 訪れ來り給ふた。まさしくパウロが告げた如く「主は我らの父なる神の御意に隨ひて、我らを今の惡しき世より救ひ出さんとして、己が身を我らの罪のために與へ」(ガラテヤ書一・四) 給ふたのである。キリストは恰も羔羊の如く、宥和の供犠そのものとなつて血を流し、神の義を犯しまつた人間の罪の代贖となり給ふた(ヘブル書九・一一—一二)。何故、神は人間の罪を赦し給ふために、かゝる血の犠牲を必要とし給ふのか。若し神が、彼の義を犯した者に對して御怒を経験し給はないような放恣な神で

のみまし給ふならば、神の愛も亦、完きものではない。神がその愛する者のために人間の生の彼岸に於て備へ給ふ神の國は、分たれることなき神の嚴肅なる義と、暖き愛に庇護されてゐる。義なる神と罪人との宥和は、それ故、たゞ人となり給ふたキリストの十字架の贖罪に於てのみ可能である。

それにも拘らず、人は今日、かく問ふであらう。贖罪といふ言葉は、當時の奴隸解放に用ひられた言葉ではないか。従つて、稀有なる宗教的天才イエスの出現を、當時の社會的事情に照して解釋したものが、この贖罪の教説である。パウロは一層その色彩を濃厚にして、この解釋に加へるに、舊約の宗教的儀式をもつてした。イエスは單なる宗教的天才に過ぎず、イエスの死は、祭司・パリサイ人等の反感と嫉妬との結果に他ならない。彼は稀にみる人格者、純情の人であつた。弟子達は彼の死を愛惜して、崇拜のあまり彼を神として祭り上げたのではなかつたか。彼等をして云ふが儘に委せよ。神がその聖靈によつて彼等の誤謬を糺し給ふまでは、誰も彼等を沈黙せしめることは出来ないであらうから。神は、宥和者としてのキリストをこの地上に遣し給ふ最も適當な唯一回の時として、この時代を選び給ふた。聞くに鈍き耳をもつた人間も、その時代の事情と、舊約の宗教的儀式の具體的比喻によつて、一層明白に、宥和者

キリストの御業を理解せんがために……。

私たちはかくして、イエス・キリストを仲保者として受入れる信仰に於て、神の子と認められる。併し、人は、キリストが神の獨子でのみまし給ふことゝ人間が神の子と認められることとの間に、本質的な相違の存することに注目しなければならぬ。その差異は實に生誕(Generatio)と創造(Creatio)に於ける質的差異である。復活のイエスがマクダラのマリヤに使命を託して「我はわが父、即ち汝らの父、わが神、即ち汝らの神に昇る」と云へ(ヨハネ傳二〇・一七)と告げ給ふた御言葉を想起せよ。何故キリストは「我が父、即ち汝らの父」と二重の繰返しをもつて語り給はねばならなかつたのであらうか。それは、イエスに於ては神との連続性によつて、本質的に彼は神の獨子であり給ふに反して、人間はその非連続性によつて猶子(Filius Dei adoptivus)としてのみ神の子であり得るからである(ガラテヤ書四・一—七)。イエスの誤らざる信仰理解は、彼の神性のこの根本前提から出發する。この外の一切の人間のイエス理解は、逆立せる解釋に他ならない。イエスの無比なる人格をもつてしても、またイエスの愛にみち給ふ業と言葉をもつてしても、否、彼の全地上生活の總和をもつてしてさへ、イエスが神の子であることを歸結することは、不可能である。それはたかだか、人間の神化以上であることが出來な

いであらう。肉によれるイエスに於て、神の獨子キリストを識ることは、人間的可能性の限界内に於て拒まれてゐる。若し、イエスの嚴肅なる死に直面して恐怖のあまり「實に彼は神の子なりき」と叫んだ當時の百卒長の判斷に、私たちもまた留つてゐる限り、私たちは最後まで動搖なき信仰の中に浮沈しなければならぬであらう。かくして人間的判斷の洪水の中に、救の岩なるキリストの御姿を、人は永久に見失ふのである。

然らば、イエスの神性のこの根本前提に對して、人は如何にしてアーメンと告白し得るであらうか。破れたる家の片隅に跪き、ひたすら聖靈の御力を祈るより外に、一切の人間的努力は無効である。神のことは神の聖靈より外にこれを識るものがない。實にこの聖靈のみが、イエスをば、人間の永遠なる救贖のために受肉 *assumptio carnis* し給ふた神の獨子として證しする。聖靈の臨在し給ふ場所、その場所に留りてのみ、宥和者キリストの地上に於ける生涯の、誤謬なき信仰認識は可能である。人間の知識の限界を破つて、神の知識にまで私たちを高めるものは、聖靈の能力を外にしてはない。従つてパウロは「聖靈に於ての外は、誰も『イエスは主なり』といふ能はず」と斷言した。

聖靈よ來り給へ！ キリスト者の信仰の作者は汝である。今やその場所に於て、かつて神の敵

たりし私たちは、仲保者キリストの恵によつて、神の味方とされた。イエス・キリストの宥和によつて、神と交るに勝る祝福は、地上の如何なる場所に於ても見出し得ない故に、そこに於ては如何なる敵も、最早私たちを決定的に害することが出来ないのである。

七、顯されたる神

肉によれるイエス、所謂史的イエスは、神の繪畫ではあつても、神の言ではない。恰も自然が神の御業を間接に啓示する繪畫である如く、こゝに於てはイエスは、かゝる相對なる間接的啓示の連続線上に於ける最上の啓示として見出されるに過ぎない。こゝに於て人は、優越者の態度をもつて、恰も美術批評家がその作品に對する如く、イエスを觀賞するのである。正しく今日の歴史的批評家のイエス理解がそれであつた。而もそこで彼等がイエスのうちに把握したものは何であつたか。餘りにも人間的なる人間イエスに他ならなかつた。自然を、人間の良心を、また史的イエスを神の啓示として眺めてゐる間は、私たちの神認識は常に震盪する。何故ならば、一切の被造物は、死滅と運命との啓示とはなり得ても、決定的な意味に於て、神の啓示とはなり得ないからである。それ故パウロは「假令肉カクニクニシカによつてキリストを知つてゐたとして

も、今はかくの如く知ることをしない」(コリント後書五・一六)と語つてゐる。

併し、所謂史的イエスを認めないことは、決して肉となれるイエスを拒むことではない。否拒むどころか、肉に於けるイエスに於てこそ、歴史の中に神の原歴史が突入したのであつた。彼に於て永遠が時間に交叉した。神が人となり給ふたのである。かゝる意味で聖書に於けるキリスト・イエスは、相對なる人間の世界を垂直に切斷する絶對なる神の世界の切點に外ならない。イエスが神の啓示であるといふことは、従つて自餘の一切の間接啓示から區別されなければならぬ。この區別が無視されるところに、近代の朦朧たるイエス體驗が、聖書の信仰の座を篡奪する。そうして、恰もヤーヴェの祭壇にヴァールが祭られるが如く、現代の教會の講壇には神の言を語る破れたる説教者のかはりに、夢みる哲學者や、俗衆の喝采に得々たる宗教的講釋師がのさばり出るのである。

然らば、史的イエスと肉なるイエスとは如何なる質的相違が存するか。既に私は史的イエスが、單なる神の缺陷にみちた繪畫に過ぎないことを述べて來た。繪畫自體は、觀賞者によつて誤解された主題を、訂正する能力をそれ自ら把持しない。たかだか繪畫が觀賞者に與へる變化は、感情移入(Objektivation du moi)による感化に過ぎないであらう。それに反して、肉に

於けるイエスは、神の活ける言である。そうしてこの語りかける言葉のみが、その交に於て、對話者の誤謬を指摘し、自らの眞理性を納得せしめることが出来る。かゝる意味で、宥和者イエスの業は、人間の誤謬の指摘及びその訂正を意味し、人はその處理の下に謙遜に立つことに於てだけ、神の聖旨の啓示者としてイエスを受けるのである。人間にとつて神に教はれることは、神を識ることであり、神を識ることは神に教はれることである。イエスの單なる教説、單なる個々の行爲がそのまゝ、神の意志を表示すると見做す人は、未だ史的イエスのみを眺めてゐるに過ぎない。寧ろ受肉者イエスの全人格と生涯に於ける救拯的業が神を啓示し、それに關聯せしめられて始めて、個々の行爲とその教説とが神の語りかけ給ふ言となるのである。かゝる意味でイエス・キリストは顯はされた神 *Deus revelatus* と呼ばれ給ふ。イエス御自身がこのことを確證してピリポに「我を見し者は父(神)を見しなり」(ヨハネ傳一四・九)と告げ、またその弟子達に「子を知る者は父の外になく、父を知る者は子、また子の欲するまゝに顯はすところの者の外になし」(マタイ傳一一・二七)と明言し給ふたのである。

このことの理解と同時に、人は、自然對人間、人間對神の關聯が全く逆であることを發見するに違ひない。即ち自然は人間の認識の對象となり得るが、神は人間の認識の對象とはならな

い。自然にとつて人間は認識主體である。併し、人間は神に對して認識主體であることが出来ない。却つて神は御自らの言なるキリストに於て、人間に呼びかけ、人間を探し、人間をば御自らの愛の對象として見出し給ふ。この主體者としての神の行爲の中にあつてだけ人は神を識ると告白し得るのである。その意味で人間の神認識は、神の言に對する反響的應答に外ならない。パウロが「今や我等神を識り、否寧ろ、神に識られたるに」(ガラテヤ書四・九)と述べてゐる言葉は、この意味に理解されてのみ正しい。現代人が神を識り得ないのは、聖書に對する全き無知によつて、自然に對すると同様に、自ら優越者の立場に立つて、神を探求しつゝあることに原因する。人間はたゞ御言に於て神の語り *Deus dixit* 且つ探ね給ふその場所に於てのみ神を見出すのである。

その場所とは何處ぞ！ 神の唯一回的な啓示としてのイエス・キリストを指示する聖書の開かれる場所、且つまた、この神の言なるイエス・キリストを、永遠なる「今」として顯す十字架の言の語られる教會、これぞその場所ではないか。

一九三三・一一・一七

昭和九年一月廿七日印
昭和九年二月一日發行

上原パンフレット第三篇
神の言としてのイエス・キリスト

〔定價二十錢〕

著者 赤岩 榮

發行者 赤岩 榮
東京市澁谷區代々木上原町一三二四

印刷者 横澤 藤盛
東京市牛込區早稲田鶴巻町三七一

印刷所 明正社印刷所

東京市澁谷區代々木上原町
一三二四

發行所 上原エクレシア

振替東京六七三九九番

言

月刊雜誌

發行日 毎月一日

主筆 赤岩 榮

定價 一部 五錢

半ケ年三十錢
一ケ年六十錢

本誌内容

- 一、講壇
- 二、聖書研究
- 三、信仰對話篇
- 四、信仰短文
- 五、聖書字解

(二錢切手封入御申込みの方には見本一部進呈)

發行所

東京市澁谷區代々木上原町一三二四
上原 エクレシヤ
振替東京六七三九九番

上原パンフレット
第一編 再版

聖書に於ける神の言

四六版假綴四十二頁

定價廿錢
送料二錢

第二編

隠れてゐまし給ふ神

定價廿錢
送料二錢

第三編

神の言とイエス・キリスト

定價廿錢
送料二錢

第四編

聖靈について

近刊

第五編 教會

第六編 キリスト者の生活

第七編 歴史とその終末

(以上七編をもつて第一次刊行完結の豫定)

終

